■研究十二月往来〈325〉

〈砧〉に用いられる「水かけ草」

三宅晶子

〈砧〉は名文としての評価が高く、謡を味わうと良い詞章だと感じる。しかし一方で詩歌の言葉が多く使用され、その言葉にどれだけの意味が持たせられているのか判断が難しい所も多い。現代語訳的に明確に意味を理解するのは困難な詞章でもあるのだ。

その最たる例が「水陰草ならば、波打ち寄せよ泡沫」ではないだろうか。

6［（クセ）］かの七夕の契りには、ひと夜ばかりの狩り衣（仮）、天の川波立ち隔て（裁）、逢ふ瀬櫂（甲斐）なき浮き舟の、梶（舵）の葉脆き露涙、ふたつの袖や萎るらん、水掛け草ならば、波打ち寄せよ泡沫。[1]

七夕の牽牛・織女のことから、唐突に「水かけ草ならば」という言葉に続いている。

大系本では「水掛け草」と校訂しているが、底本は「水かけ草」であり、室町・江戸期の謡本では「水かけ草」あるいは「水かけくさ」と表記されている。濁点表記が無いので、「水掛け草」なのか「水陰草」なのか判断できない。現行諸流では、観世流が「水陰草」で、他流は全て「水かけ草」である。明和改正謡本は「水ぐま草（クサ）」と、違う言葉に変更している。江戸期に濁点表記や漢字を当てた本も皆無ではなかろうが、現存謡本の全てを確認していないし、実際どう謡っていたのか判断できない。世阿弥は「水陰草」「水掛け草」どちらで作ったのだろう。

［（クセ）］前半は七夕に因んだ内容である。牽牛・織女の契りは、一年にたった一晩の仮初めの逢瀬ということで「狩り衣」に「仮」が掛詞となっている。「衣」の縁で「立つ（裁つ）」「袖」と繋がる。逢瀬を隔てるのは天の川であり、夜が明ければ「天の川波」が二人の間に「立ち」隔たってしまう。せっかくの「逢瀬の甲斐もなく」、まるで「櫂のない浮舟」のように行方の知れない恋路なので、「梶の葉」をこぼれる露のように脆くも落ちる涙で、二人の袖は萎れるにちがいない。七夕には梶の葉に歌や願い事を書いた事に因んで「楫→梶」が使われている。

さて問題の「水かけ草」であるが、古くは夫と自分のこととして解釈していた。「水に流れる草をいふ。我が夫が水陰草ならば、我方へ波のつれ来れの意」（大和田建樹『謡曲評釈』）、「水に流れる草。二星のしをれた袖を、妻のしをれた袖に取做し、わがしをれた袖が水陰草であるならば、これを夫の方へ打ち寄せよといふのである」（佐成謙太郎『謡曲大観』）、「わたしが水陰に生えてゐる草だったら、泡のやうに浪が夫の方へ打寄せてくれ。水陰草は天の川の縁語」（田中允、日本古典全書『謡曲集』）などである。日本古典全書は車屋本を底本とするが、それ以外は全て現行観世流を用いているから「水陰草」で注を付けている。大系本（表章校注）以来、上ハ前までを七夕に関する内容で統一しているとの解釈がなされるようになった。本稿も同様である。大系本では「涙の露の主が水かけ草ならば、天の川の川波が泡と同様に打ち寄せて逢わせてやればよいものを。」と訳されている。

この謡を難解にしているのは、なぜ七夕の二人が「水かけ草ならば」と言われるのかということであろう。それが不明であったために、古くはシテと夫のことであると解釈されていた。歌語としての「水かけ草」の理解無しでは解釈できない表現なのである。「一晩限りの逢瀬のために、二人の袖が涙の露で濡れる。水陰草は天の川に生える草で、それに置く露が、二人の涙である。だから水陰草は二人のことだ」という連想が働いて、初めて成り立つ表現であろう。世阿弥がこのように用いた「水陰草」は、当時の観客には容易にわかるポピュラーな歌語だったのだろうか。

「水陰草」は『万葉集』巻十

2017 天漢（アマノガハ）　水陰草（ミツカケクサノ）　金風（アキカゼニ）　靡見者（ナビカフミレバ）　時来之（トキヘキニケリ）

を最初とする。この歌は『古今和歌六帖』に人丸の歌として

134 あまの河水かげ草の秋風になびくを見れ
　　ばときはきぬらし

で入集、この形で流布した。後に『続古今和歌集』秋上307には作者を山部赤人、五句目を「ときはきにけり」として所収される。

『袖中抄』(2)には、「水かげ草」を一項目立て、『古今和歌六帖』の形で歌を掲載し、「水陰草とは水の陰に生たる草を云」と説明した上で、「在書云」として

　苗を云也。其故は（水をかくるなり。）天河の水をかくと云也。其水と云は空より降下たる雨也。されば天河水かげ草と云は、天川に生たる草にあらず。こゝの苗に天川の水をかくる也……

という別の見解を紹介する。そうした後

　此水かげ草とは水陰とかけり。水懸とかきたらばこそ如此には申さめ。萬葉の書様は、かたきことをかくし、やすきさまにかきなせど、さすがにこの體のことばたがはず。水のかげの草にてあるべし。

と、明快な解答を示している。当時すでに「水掛け草」という別の考え方もあるが、顕昭は『万葉集』の用字から、それを否定している。

源俊頼『散木奇歌集』「寄草恋」には

1216 谷ふかみ水かげ草のした露やしられぬ恋
　　の涙なるらむ

とあり、天の川ではない谷川の水陰草が詠まれている。ここで草に置く露が恋の涙であるという見立てが用いられている点は重要であろう。そして、『清輔集』「七夕」の

99 天の河水かげ草におく露やあかぬわかれ
　　の涙なるらん

が登場する。これは『新勅撰和歌集』秋上に218「七夕後朝の心をよみ侍りける」として入首しており、後代への影響大の歌である。世阿弥もこの歌をふまえているのだろう。天の河に生え、二人の恋の涙の露が結ぶ草である。

「水陰草」は八代集には一首も入首していない点を重視すると、平安・鎌倉期には、それほどポピュラーな言葉ではなかったのかもしれない。ところが興味深い点は『和歌題林愚抄』（室町中期成立）に、天の川関連で九首も入首していることである。大規模な類題和歌集ではあるが、室町期の歌界の状況を知るには適した歌集である。

また『看聞日記紙背』の「山何連歌」応永三十年五月二十五日（連歌データベース検索）

　つきいりてあさせやたとるあまのかは
　　みつかけくさのつゆそたまなる

という連歌が存在する点に注目したい。後崇光院の日記の紙背文書に記されている。能の観客層と共通する人々による連歌であろう。この句は天の川の水陰草を念頭に置き、草に結ぶ露の玉を詠み込んでいる。

一方、応永二十年五月十六日

　さみたれのかはおとになるはれまかな
　　みつかけくさのさなへとるころ

同三十四年七月七日

　なみやつゆちるはをはなのかせのおと
　　みつかけくさのほやなひくらむ

という二例がある。『染田天神法楽千句』である。染田天神は奈良県宇陀市（旧宇陀郡室生村染田）にあり、室町中期から一五〇年余、天神講が結成され毎年盛大な連歌会が催された。応永二十年と三十四年の「みつかけくさ」は、「水掛草」であり、顕昭が否定した「水を掛ける苗」の意で用いている。

連歌においては、他に年代不明の『大発句帳』（陽明文庫蔵）に二度みられるが、それ以外の使用例は未確認である。応永二十年代から三十年代にかけて、都・奈良での連歌興行に「水陰草」「水掛草」両方の例が見られるのである。「水掛け草」の例である染田天神の句はさておき、「看聞日記紙背」が存在するのは興味深い。世阿弥時代、「水陰草」は天の川に生える草で、露との縁語関係で詠まれる歌語であるとの認識が、浸透していた証しである。水陰草には七夕の二人の涙が露として結ぶという和歌的理解に基づき、だったら水陰草は二人だという飛躍的発想をしているのである。

（横浜国立大学教授）

注(1)岩波日本古典文学大系『謡曲集上』所収の本文（天正四年三月奥書の堀池識語本、能楽研究所蔵）。本文中では「大系本」と略称。

(2)歌学大系所収の本文。